

0093 阿波踊り 060812

カンカンチキチキドンドン 暗闇の中から連がくねってやって来る。スポットライトがあたって、白っぽい着物、提灯、太鼓、幟・旗、鉦（かね）、独特の手つき足つきと総勢40人だそう。見ているだけでゾクゾクしてくる、彼らの身体の動きが伝わってくる、肌で知る感動だ。彼らの写真を撮るのが好きで、何枚も撮った。

昔、家の酒席、飲み屋で踊っている男女がいた。手をあげて顔を横に向けてうっとりとして踊っていた。オレは身体の中には踊るという因子が無くなってしまったのかな。皆さん気持ちが高揚すると自然と四肢が動き出すのかもしれない。身体の動きが、生まれ育った地域の独特の動きリズムになるのだろうね。外国の踊りなんてすごいね。

茨木市の30校ぐらいの各小学校でそれぞれ夏祭りがある。この小学校での祭りは“地域のイベント”としての祭りだ。地域に元々あった祭りではない。地方から茨木という都会に集まって来た方々が祭りをやろう、また市から祭りをやりませんかとの誘いが発端で地域祭りがある。地域に元々100年200年と住み続けてきた人たちだけのこじんまりした祭りは別にあるのだろう。ひっそりと昔ながらの祭りが続けられているように思う。オレもこの住所になってまだ50年、半分が藤井寺市、半分が山口県出身だ。

本来の伝統的な祭りは、神事だったようだ。神の事となると詳しくは知らないが、お供え、踊り、神輿（みこし）、宴会が神を中心に、神を意識して行われる。「こんな事をして神様が許してくれるだろう、もう少しふざけても神さんが喜んでくれるだろう」なんて勝手な解釈をして、次から次に突飛な事、びっくりする事、おもしろい事に発展していったのだろう。神を迎えるのが陰暦の満月と、月に関係してくるとか、神を乗せるのが神輿であって、御輿という漢字ではないとか、神に最高の踊りを、音楽を楽しんでもらうということで、最高の芸能を完成させようと頑張ったとか。難しい話抜きでそれぞれの祭りができて、それぞれが競い合って、それぞれの地方に有名な祭りが出来上がった。

祇園祭は何度か見た。京都の代表的なというより日本の代表的な祭りのひとつ。雅やかな中につんとすました凄み。金に飽かした装飾と技術がちりばめられた鉾（ほこ）の数々。見た事もないお宝があるやも。文句は無いね。

岸和田の地車（だんじり）祭りも行った。中西プロのカメラ助手として、岸和田駅でモモヒキ、ハッピー着用。地車の尻に付いて走り回った。20か30の地車が、街中を走り回っていた。ここの地車、新調するのに1億円がかかるとか。しかも地域の人たちの自前だそう。

近所に住みながら、大阪天満宮の天神祭を見ていない。見に行かねば。

0094 槍鉦（やりがんな） 090812

昨日、東大寺で大仏さんをきれいに清めて、お盆を迎える「お身拭い」が行われました。

朝6時、二月堂のすぐ近くの沐浴場で身を清め、白装束と草鞋を貰います。

木綿のキャラコの紐付きで、足が動かしやすいように膝丈です。

7時から大仏の魂を抜く読経があり、7時半からマスクをしての作業です。

掃除の後は、白装束は汗と埃で汚れきっていましたが、二月堂の沐浴室で汗と埃を落とし、一連のお身拭いの行事は終わりました。

友人から「お身拭い」に行ってきたとメールが来ました。「お身拭い」の映像TVで何度か見た事があるが、大仏さんの中も掃除をするのだろうか。大仏さんはこうして作られたという本を見た事があるが、大量の銅をドロドロに溶か

す、型に流し込む、上へ横へと継ぎ足していく、外を磨く、金箔を張る、色を塗るなんて考えるだけでも面白そうと興味をわいてぞくぞくする。大仏さん出来てから何度かの火災で解けたり潰れたりして現在に至っているそうだ。創る事に興味のあるオレとしては、いろんな職人さんが大仏さんの中に入って暗い中、材木の柱を、横木を入れて補強、銅を叩き、削りと何日も作業をしたのだろう。そのような作業の途中の職人さんの“古代の人の落書き”“メモ”“スケッチ”なんかが無いかなときよろきよろ探さだろうな、あればおもしろいだろうね。

思い出したのが奈良薬師寺の金堂再建工事現場。30歳前後だったが、Nさんが、内装の板に絵を描いていた。板とは金堂内部の壁やら天井に張り並べる内装材。1枚持ち上げるのに「よいしょ」というような立派な白木の板に蓮の花、葉、四角・三角の模様と同じ図柄を毎日描いていた。描くというより、下図の上から丁寧に塗り込んでいくという作業。分厚く長い板が何十枚何百枚と立てかけられていた。絵の具は最高級の日本画用岩絵の具とかで、聞けばびっくりするような値段だった。緑、赤、青、黄と懐かしい抹茶臭い図柄と色だったと覚えている。そう言えば上等のお寺にはそんな絵がたくさん描かれている。

「工事現場案内したげるよ」と付いて行った。仮設の大屋根の下に広々とした足場が屋根まで何段かあり、柱、梁、木組みがどっしりと在った。当時マツダのキャロルに乗っていた。それに乗って何度か遊びに行った。絵も本体工事も何年かかかったようだ。宮大工のあんちゃんが（あんちゃんとはいえ当時はオレと同年輩、常岡棟梁の弟子かな）槍鉋の実演をしてくれた。「へー、こんなものか」と思った。今の鉋に比べて仕上がりがぼつぼつしている。ところが出来あがって建物になってみると、木の地肌、ぼつぼつがむしろしっとりとしている。

工事現場では、宮大工も作業服にヘルメットをかぶっていた。和服ではなかった。槍鉋は、

引いていたのか、押していたのか・・・忘れた。

0095 奈良 110812

東大寺「お身拭い」の話から、歴史の事を忘れてしまっていると年表を開いて、平城京を調べたら都があったのは100年間ぐらい。その前は飛鳥時代。「今頃何を、小中学校で習っただろう」と怒られそう。奈良時代の前の飛鳥時代もほぼ100年。難波20年、近江大津5年、飛鳥浄御原20年、藤原京15年と遷都という都の引っ越しはあるが、だいたいは今の明日香村に100年間だとか。飛鳥時代に初めて「天皇」「日本」という言葉が確立したとか、「そりゃ違うぜ」と怒鳴る方もおられるかもしれませんが、オレそんなもんかなと納得。その前に卑弥呼とか任那（みまな）とかがありますがその話は次回。

最近気に入ったのが、文字のなかった時代、当時の詩や伝承文を漢字で残した文章を“音”で聞いてみると、これはきれい。先日は古事記のある部分と柿本人麻呂の長歌を口遊んだ。舌がもつれるが、なかなかいい。

二十歳の頃、冬の寒い日の夜中、春日大社の野外で舞楽を見た。詳しい人なら縷々説明できるのだろうが、古い話で当時説明を聞いたようだがそれこそ右から左。ただ網膜に残っているのが、闇の中でほんま物の篝火が焚かれていた。野原に板敷きの簡単舞台、もちろん屋根はなかった。まわりに篝火、数少ない見物人、横で雅楽を演奏していたかな。天狗のような、猿のような、翁のようなお面を被って、衣装は闇夜に映えるように、白に近い色、棒のようなものを持って、右へ左へ激しく動き踊っていた。闇夜に天に向かって天に奉げる踊り、これは感動した。人が少なく寒かったと覚えているが、感動だけが先行していい加減な事を言っているかもしれない。違ったらゴメン。

“光と闇”を意識し出したのはまだ10年。中西プロに同道して写真を撮るうちに、「写真とは光と闇から出来ている」と分かった。「そりゃ違うぜ」と聞こえそうだが、まいいですね。白い壁の上と下の色が違うとは意識しなかった。「あんたデッサンできるからそれぐらいわかるでしょう」と言われて、なるほど白い壁のあらゆるところで白さ、明

るさ、彩りが違ふと再発見。画を描く時には全く意識しないし、不便も間違いもないが、写真やパソコンのモニターの色となると、上下左右の色が違ふ。これには戸惑っております。

お寺の御堂の壁面天井に極色彩の壁画、蓮の花や葉、三角・四角の模様が描かれている。薄暗いお堂の中で金色に輝く仏像がぼんやり浮かび上がり、壁面天井の極色彩の絵が、原っぱや草むらのように見え感じる。お堂が薄暗いのは仏像をありがたく見せる演出かな。

新薬師寺の十二神将も薄暗いお堂の中に在った。あの仏像は最高にすごいと思う。明るい外からお堂の中に入ると、最初は暗くて何も見えないのが、時間が経ってジワリと浮かび上がってくる。あの仏像はすごい。見てない方は是非見てください。

光と闇、夜・暗い・陰・影の事を考えてみよう、中に入って考え直そう。といってもこの話は、物を見るデッサンの話で、人の話、心の話、権力の話ではありません。その話は次回。

図版はスペインの宮廷画家ゴヤ。ゴヤの宮廷と関係ないこの絵、好きなのです。

0096 車庫証明 150812

キヌちゃんより車を戴くことになった。ハイエースを手放して半年、車が無いのは不便だなという事が何回かあった。車は経費がかかるが便利である。今回やってくる車はホンダのステーションワゴン。「名義変更は自分でやったら」との話にその方法を調べてみた。警察署での車庫証明の取得と陸運局での名義変更の二つの作業のようだ。

遠来の友が来た。埼玉県飯能市に住む福永氏、ヒゲさんという。二十歳の頃からの友人で、彫刻を創っている。その彼が凝り性で制作の為の作業用の材料、又制作用の材料を手作りするのが好きな人だ。絵を描くための紙を漉く、造った粘土彫刻をブロンズに鑄造する、アトリエを建てる等と。普通の人、絵を描く紙は紙屋さんで買う、ブロンズの鑄造は大変でプロに頼む、家はもちろん建築屋に頼む。「何でもかんでも自分でしない、作品売れないよ」と自戒を込めてオレがいう。そういうオレも手造りキャンバス、作品の写真撮影、パソコンで案内状やらパンフレットの版下作りといくつかこなせる。モノ創りの作家には、作品創りしかできない人と、いろんな作業、材料を何でもやるぞ作るぞという人と色々いる。

“絵の具を” 手作りする絵描き。油絵具は、無機・有機顔料を粉末にまで潰してポピーオイルで練る。色の石から砕いて作っている人もいる。

“キャンバス” を手作りする絵描き。麻・綿・板に糊を塗る。その上から下地剤を塗る。たったそれだけの作業だが難しいぜよ。

“アトリエ” を建てるヤツ、“額” を作るヤツ。「へえ、この建物を自分で建てた」「え、この額を自分で作った」と本

職に近い仕事ができる人もいるのにはびっくり。オレも額を作るが、「がたがたでへただねえ」と定評。

“紙” ヒゲさんは絵を描くためには手作りのいい紙が欲しいと紙を漉いていた。楮（こうぞ）、三桮（みつまた）等の木を水につけて、細かく潰してと手間と時間を掛けた大変な作業をしていた。

絵や彫刻はそれこそ手作り作業で、その前段階の材料を手作りするのは理屈に合って不思議ではないが、程度問題で、材料の手作りが忙しく楽しく本職になってしまったとか、材料作りが忙しく作品を作る暇もないなんて、笑えぬ話も多々ある。

ヒゲさん、故郷の高知で小中学校の同窓会があると1泊して出て行った。4.5日したら帰りのもう1泊の予約を受けている。「生まれた時から貧乏だった。最後の10年ちょっと贅沢するぞ」と楽しそう。5年前に役所から「20年間、東京都でバイトをしていませんか」と年金事務所から電話があったのが人生好転の始まりだとか。夫婦の年金が15万円ほどと遺産が入って家を買ったと破顔一笑。今回の旅は、埼玉から軽自動車が高知まで。途中1.2泊、高知で2.3泊、帰途1.2泊だそうだ。最後の旅だと言っているがあの元気度、まだまだである。酒飲みの彼もビール1缶ぐらいしか飲まなくなっている。「ヒゲさんの絵は売れる絵だよ。器用貧乏はいけませんよ」

これを書きながら、正午の1分間のサイレンが聞こえた。8月15日。たくさんの若者が死んでいった戦争が終わった日だ。

0097 車庫証明 II 160812

前回は車庫証明の話のつもりがヒゲさんの話になった。“車の名義変更”で検索をした。

○車庫証明は、正式には「自動車保管場所証明書」だそうだ。

○申請場所が警察という役所なので「横柄な係官が、一字一句間違えても突っ返される」と載っていたので恐る恐る行ってみて、茨木警察の年配の係官は親切だよ。

○半年前に手放した車のナンバーか車台番号が要するという。ちゃんとした駐車場だと説明するために「半年前まで使っていた」と言ったのがいけなかったのか「手放した車が正式に何処に在るか、もしその車をまだ持っているなら、1台分の駐車場に二重の申請になりますので許可できません」なるほど理屈だが、ハイエースのナンバー、まして車台番号を書いた書類は全部捨てた、困った。帰って念のために任意保険の自動車保険契約「中断証明書」を見たら、ナンバーが書いてあった。明日にでも警察にもっていこう。任意保険の中断証明書とは、多少自慢になりますが、オレはずっと無事故無違反なので保険の等級が高い。次回加入時、その中断証明書があれば同じ等級が使用できるという。まず警察での費用は2700円ぐらいだ。

○4.5日先に車庫証明が出来上がり、それをまた警察まで取りに行く。次が陸運局だ。旧持ち主の印鑑証明、委任状、新持ち主の印鑑証明等いくつかの書類をそろえて、陸運局で手続きをする。陸運局は寝屋川警察の近所、ここも自転車でひとっ飛び。書類もネットで入手、書き方見本も入手。なるほどこれなら時間があればなんとかなる。近々、キヌチャンと十三で一杯飲みながら、書類を書いてもらえば簡単に進みそう。

「何でもかんでも自分でやったら、いい絵描けんぞ」と人に言いながらも、時間があるし、手数料もかからないしと、いい訳をいうも、忸怩たる思い在り。

今年の盆は久しぶりに家にいた。毎年信州の山に登っていた。大阪もアトリエも相変わらず暑い。「アトリエは暖かいですぞ」と言いふらしている。窓を開け換気扇と扇風機を全開すれば風が入るが昼過ぎの2時3時は風さえ暖かい。身体はベタベタ、のどは乾く、クーラーは聞かないのでつけない。「遊びにきてください」とはとても言えない状態の日々です。

「この暑さはきつい、この夏が越せるかな」と思うのは4.5日。それが過ぎると身体が順応するのだろう。順応しないと越せないが幼児でも老人でもどんなに病弱でもうまく順応する、人間の身体はいい塩梅に出来ているのだと感心。

0098 莊子 170812

良寛さんの本を読んでいたら、何度か下記の話に出合った。これはフィクション（作り話）と言う人と、そうでないという人がいる。たとえ作り話だとしても本当の良寛さんらしく気持ちを込めているフィクションだという人もいる。下記はメモで原文は手元に無いが、良寛さんが生きていた頃に書かれたもので、おおよそ次のような文章。

若いころ四国方面を放浪していた。雨の日に庵を見つけ一夜の宿を乞うた。「どうぞ」泊めてくれたのが瘦身の僧。彼は話もせずただボ～っとしている。おかしな人かなと思ったが眠くなったので寝た。朝、僧も横になって寝ていた。雨が降り続くので「もう1泊」「どうぞ」と。粉を練って二人で食べた。机には字があちこちと荘子の本。字は美しい。「何か書いてくれ」と頼むと、さらさら書いてくれた。良寛と落款があった。後年「あれがあつたの越後の良寛さんだったのか」と述懐する話。

何度か読んだが読み過ぎていたのが荘子の本。無視というより荘子そのものを知らなかった。ところが後日良寛さんを紹介する本の中で荘子の紹介も在った、読んだ。「へええ 2500年前に中国にこんな人がいたのだ」とびっくり愕然驚愕（がくぜんきょうがく）。

今昔物語を見つけた時も喜んだ。今昔物語の中の一部に鬼やら動物やら、又異次元の世界、今やら何処やらとの発展に驚いた。

荘子を見つけた。荘子はすごい。「オレのために書いてくれた本だ」なんて・・・ちょっと紹介しようとメモを見たら、本も作者も名前を書き忘れてる。なので、ちょっと概略。間違っているかも。作者先生ごめんなさい。

荘子の繰り広げた世界は孔子や孟子の説く良識の世界ではない。荘子の価値観は、世俗的で常識的な孔子や孟子とは相反する。

人間、人間社会を醜く、愚かで、みじめなものとしたうえで、自分を自由な精神世界を置く。

人は嘆き、悲しみ、呪い、傷つき、貧窮、孤独、汚辱、敗北にまみれて生を送る。

混沌、カオスの海の中に身を投じ、カオスを生の中に抱き込み、生きよ。

あらゆる矛盾対立を抱きこんだ混沌の宇宙を生きるところに人間の解脱（ゲダツですぞ）がある。

孔孟のモラルに満ちた世界ではなく、大いなる哄笑、諧謔の中に人生はある。

野溜に墮ちた鬼が、糞尿にまみれ、糞尿にまみれた自分をおもしろがりながら生きる、真実存の世界。

遊戯の中に生きる。

荘子自身、陋巷（ろうこう）にうずもれ、貧窮の中で過ごした。

メモなので内容が違っているかもしれないが、オレ納得。これはいい、すごい、見つけたという感じである。

本の中に作者先生も言っているが、荘子の本を読んでいた、荘子に傾倒していた良寛が、乞食生活を送ったという事がわかると。思うに良寛、山頭火、放哉らは未だに騒がれているが、だまって死んでいったオッサン、オジンが幾人もいただろうね。彼ら傑物は大いなる哄笑人生なのか、残念人生なのかわからない。女の人でこういう考え方生き方はしないだろうね。世界中を探したら居るかも。

荘子の事をもっと調べてみます、考えてみます、感じるようにします。

図版は、中国の切手に載った荘子と我が友人たち。

0099 ないものねだり 220812

「男性の視線が胸元に来るのを感じる」と女の方のコメント。夏の季節、薄い布がちょっと身体を覆うような服の隙間に視線が走ります。「いやあ、見ますよ。その膨らみ、その谷間」

「女性は自分に無いものに憧れ魅力を感じます。シャツの袖から見える腕の筋肉、浮き出た血管」と、解説氏。「え、腕が、血管が、そんなものならいつでも見せますよ」とオレ勇んで腕まくりをするも「いやいや、あんたのは、イラン」と言われそう。

≪柿食えば 鐘が鳴るなり 法隆寺≫

技巧も飾りもない。わかりやすい言葉だけ。はは、うまく表現していると素直に関心する。

≪とぶとりの あすかのかわの かみつせに いしばしわたし しもつせに うちはしわたし
いしばしに おいなびける たまももぞ . . . ≫

柿本人麻呂 古代の日本語を うまく繋いで、繋ぎ合せての詩。古代のリズム、においがする。

ないものねだりをもっと考えようとしたが今日はここまで。

この何日か、午後になると夕立が降る。夕立の言葉通り、4時5時が中心だ。昨日も3時頃曇ってきた。少し時間が早いが降られたら嫌なので、運動に出ようと着替えて扉を開けた途端に、バラバラと大粒の激しい雨。慌てて洗濯物を取り入れて窓の外を見ていた。隣の家が新築工事中。今日は朝からクレーン車が来て屋根を作っている。丸太ではないけれど“ログハウス”の形式の建物ようだ。枕木のようなでかくて長い木を下から積み上げて四方の壁ができた。2階の床を張ればもう屋根だ。2階の天井の上に屋根ではないらしい。雨宿りしながら大工さんが「もう雨は終わりらしい、雷さん何か言ってるよ」と冗談が聞こえてすぐ後またバラバラと来た。

雨脚が激しい。〇〇ミリの雨と言うが数字は分からないが、たちまち水溜りのできる雨。昨日のは30分ぐらいで終わって空が明るくなったので河原に行ってみると、ほとんど増水していない。河川敷は水溜りがいっぱい、たちまち靴の中に水が入ってきた。

山の方を見るとまだまだ曇っているが、山は見える。山が見えなければあの辺りは雨の真っ最中。山の方はよく雨が降る。住んでいる平野部に比べて雨の量も時間も多い。激しい雨が何時間も降れば川がたちまち増水する。10センチづつ水が上がってきて慌てて土手に上がったこともあった。

コブシ大の石ころが溜まる場所も決まっている。石や砂利が溜まると歩きにくいし走りにくい。河が大きく巡回している所に何時も溜まっている。そこにいつも太公望のおっさん連中がたむろしている。普通の流れより少し歪んだ所に、魚釣りの醍醐味場所があるのかもしれない。

杭やら、手すりやら・橋脚やらに、草が絡まっている。引っかかっている草の高さを見て「水がここまで来たのか」と分かる。

0100 杉原千畝記念館 270812

地区の人権バスツアーで杉原千畝記念館に向かう。

デカイ観光バスの最後尾左側の席、総勢40人足らずでゆったりとしている。

岐阜に向かう高速道路、京都を抜けるまでの市街地は、上だけ開いたトンネル状の大きな騒音遮断用壁が延々と続く。景色は時々その隙間から見えるだけ。30歳代の頃土木の設計事務所に頼まれてこの壁の絵を描いた事があった。当時はこのような無粋な壁が少なく近隣の苦情で、壁を設置したのだろうね。

その壁に蔦のようにどんどん伸びる草があちこちに絡まっている。安威川の水の傍でもこの草が上へ横へとどんどん伸びている。夏の炎天下、力強く陽の光に濃い緑を輝かせている。

日本列島の荒れ地更地は瞬く間に雑草雑木で覆われるという。高温多湿が植物類細菌類には最適の生活環境だとか。この蔦状の草を始め、まわりの小高い山々の緑が生き生きとしている。

草津ジャンクションを真っすぐ走る頃には遮断壁も少なくなり田圃が見えだした。隣の席に現役の兼業百姓中西さん。「もう宮城辺りでは新米が出ています」つい先日田植えと思っていた。「畝おこしをせんと・・・」「田んぼに水入れてマンネン」「田植えで、てんやわんや」「今日は耕運機を運転せんと・・・」「朝から水を入れているので、今から水を止めに行かんと」と田圃の世話の話を何回も聞いていた。見るとこの辺りの田圃の稲は、もう穂を垂れて緑がやや黄色味を帯びているのも所々に在る。茨木の家近所の田圃の稲はまだまだ青々している。日本列島では新米は8月9月10月と順次できる様だ。ところで“青々”という言葉、本当は緑色なのに、緑と言わないで青という不思議。

八日市ICに近づくといつも登っている山々が見えてくるが今日はこの話は横に置いて・・・残念なり。右側のカーテンの向こうには、霊仙、御池、藤原と鈴鹿山系。左の穀倉地帯の向こう、そのまた琵琶湖の向こうには比良山系なり。愛知川（えちがわ）が見えた。

岐阜を過ぎ東海北陸道に入ると地面は起伏に富み集落、田圃、山と交互に表れる。この辺りのコメは「何米？滋賀県のコメは近江米というが・・・」家々は瓦葺き、トタン葺き、畑もある、墓もある。

杉原千畝は1940年のヨーロッパ、リトアニアで領事の時、ユダヤ人へ日本通過のビザを発給した。第2次世界大戦当時ドイツがユダヤ人迫害を進めていた最中、ヨーロッパから脱出したいユダヤ人への日本通過のビザを発給した。六千人ものユダヤ人の命を救った。

その話を聞きながら、当時戦場でも戦場以外のいろんな所でも、殺された無名の人の事が思われた。「ヘソマガリ、天の邪鬼」と言われるかも知れないが、歯ぎしりをして死んでいった奴等の妄想、幻想が目につく。

もうひと事、ヘソマガリだが、当時杉原千畝は国の方針、外務省の方針、軍の方針に逆らって何千枚もの手書きのビザを手書きで発給したが、その後彼は、身分剥奪、外務省解雇とか、起訴監禁などの処罰を受けていない。これは何？ひょっとしたら日本政府は、ひと筋縄ではない外交をしたのではないのかな。ドイツという同盟国とは仲良くしておきたいが、憎くもないユダヤ人に恩を売っておくのもいいと考えた人がいても不思議ではない。オレの独白おかしいかな。

帰途のバス、席は同じところ、夕陽に当たって田圃の稲がそよぐ、光る、揺れる。横から射しこむ光が陰影をきつくする。きらりと光る裏側は闇の色。土手があって、こちら側が明るくこちら側は黒、川面がキラキラざわめく。木があり田圃があり集落がある。それらのみんなも、こちら側が明るくこちら側は黒。

田圃も山も川も、その場の横に、傍に立ちたいね、車窓ではつまらない。